

(別紙様式)

(A 3 判横)

令和 7 年度 学校自己評価システムシート（東京農業大学第三高等学校・同附属中学校）学校評価委員の皆様への記入用シートです。

目 指 す 学 校 像	1 主体性を重視する教育活動を展開する。 2 部活動の強化により、学校に活力を与える。 3 生活指導を徹底していく中で、地域社会・国際社会から信頼される人材を育成する。 4 私学としての特性を生かし、生徒・保護者と向き合い満足度を高める学校改革を進める。 5 志願者を増加させ、定員の確保をめざす。 6 財政の健全化を目指すなかで、生徒への教育サービスを向上させる。 7 授業力のさらなる向上を目指す。
-------------	---

重 点 目 標	1. 外部研修・オンライン研修・生徒による授業評価を通して、授業力と生徒の学力と進路実績の向上を図っていく。 2. 学年・教科・コース・クラブ活動・学校行事等の連携を強め、すべての教育活動で主体性を重視していく。 3. 将来の社会変化に対応できる人材育成を目指し、民間企業等と連携しながら特色ある教育内容を構築する。 4. 志願者を増加させ、定員の確保を目指す。
---------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

お名前 _____

※学校関係者評価実施日とは、学校評価アンケート回答日とする。

＜学校評価委員会構成＞
学校関係者評価委員 5名
外部評価委員 10名

※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

		学	校	自	己	評	価			
		年	度	目	標	年度評価（令和8年3月31日現在）				
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策			
1	生徒の学力と進学実績の向上のために、教員の教科指導力・進路指導力・生徒指導力を向上させることを目指す。 生徒による授業評価、教職員の外部研修会、オンライン研修への積極的な参加、研究授業や授業参観の実施と研鑽、他校研修の実施等、情報の共有化により検証を行い改善を図る。	① 教科指導力の向上 ② 進路指導力の向上 ③ 生活指導力・学級経営力の向上	① 生徒による授業評価と外部機関の分析資料の共有。外部研修会参加と教職員間での情報共有。研究授業の計画的実施と教科会議での検証・授業内容や定期テスト・講習への工夫・改善。 ② 進路意識の向上・入試に関する研修の積極的な参加と学年・教科・コースによる情報交換。模試等の分析データを職員会議で共有し、課題と改善策を検討。 ③ スタディプラスへの入力と入力状況の確認、自習室の活用・将来への目標設定等を促す二者面談の定期的な実施。	① 授業改善への取り組み・研修会への参加と報告内容・授業見学・参観数・オンライン研修への受講状況、評価者による評価と各自の研鑽。 ② 進学実績の年度別累計比較と指導内容別の振り返り。 ③ 基本的生活習慣全般の評価。	① 模擬試験結果は多くの教科が入学時から上昇傾向にあり、授業改善は進展しつつある。しかし大学入学共通テストの全国平均点との差異では教科によっては大幅な向上は見いだせていない。	B	① 各教員が、生徒による授業アンケート結果を分析・検証し、教員間での情報共有と数値目標を設定する。「教員授業力向上研修企画」を実施し、授業改善の一助としていく。			
					② 生徒への指導を複数名の教員により組織的に取り組んだ結果、国公立大学合格者数が過去5年28→23→24→25→36と増加し、一定の成果を出した。			A	② 生徒が達成感と満足感を味わえるような授業展開、主体的に学びに向かう姿勢を構築するような課題を提示する。iPadを有効活用する。	
					③ 一人一人の学力状況・課外活動と学校行事への取り組み等の実情を教員間で共通認識し、保護者生徒の満足度を高める工夫をした。高校3年生の進路決定率は95.8%となり高水準で安定している。				A	③ 二者面談、朝のSHRを有効活用し、生活リズムの改善と家庭学習の定着の徹底を図る。個別デスク型自習室、CoreLoungeの活用により、自己学習の習慣を身につけさせる。
2	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・中高一貫の各コースの現状認識と改善点を列挙し、さらなる教育目標の設定や教育内容の充実を再検討する。 学年主体の横軸の教育活動に加えて、コースが3年間（中高一貫コースの場合は6年間）を見据えた縦軸の教育活動を展開していくことで、生徒一人一人の希望進路実現に寄与していく。	① コース会議で協議され、提示された課題に対する改善策の実施。 ② 生徒にかかわる様々な部署での連携を強化した学校行事・特別活動の実施。 ③ 生徒会活動・クラブ活動の活性化。	① 各コースの特色ある教育プログラムを実践する。 ② 主体的な学びの姿勢を構築するための企画・行事の実施。 ③ 部活動・生徒会活動の自主的活動を支援する。	① プログラムの実施状況と成果の検証と評価。 ② 目標の設定とその実現方法の検証・評価。 ③ 部活動・生徒会活動支援についての検証・評価。	① Ⅰコース：グローバル課程・理数探究課での学会発表において一定の成果を得た。Ⅱ・Ⅲ・中高一貫コースは探究の発表で生徒が意欲的に取り組む姿勢を示した。	B	① 令和8年度は、コースの教育活動の取りまとめとしてコース統括主を任命。コースの教育活動をシステム化していく。			
					② 教科・分掌間での連携強化を図り、校外学習を実施した。生徒自らの創意と工夫により文化祭・体育祭等を実施できた。			B	② 特化した校外学習等を展開し、教科融合・文理融合教育を実践していく。	
					③ 高校部活動は新設のダンス部を含め、延べ7クラブが関東大会・全国大会出場を果たし、大きな成果を上げた。				A	③ 学校行事・部活動等で創意と工夫の大切さを生徒に理解させ、生徒の主体性・協調性・創造性を涵養する。

学校関係者評価委員・外部評価委員評価	
評価会議開催日 令和8年5月16日	
達成度	理由・意見
B	大学入学共通テストの大幅な向上が無かった。 生徒一人一人が大学進学に向けての目的を明確に示せるような工夫がほしい。
A	国公立大学合格者数が増加したが、学校目標の合格者数 50 を達成できるように努力と工夫を積み重ねてほしい。
A	進路決定率が高水準で安定している。 浪人生が大幅増加している中での進路決定率の高さは評価できる。 CoreLounge の有効活用に期待感が高い。
A	生徒が意欲的に取り組む姿勢を示した。
A	生徒自らの創意と工夫により実施できたが、今後、生徒の主体性を高める取り組みを一層強化してほしい。
A	多くのクラブが全国大会・関東大会に出場した。地域社会からの印象として生徒の表情が穏やかになった感じがする。住民への安心感を与えてくれる。

3	様々な体験・実験・観察を通じて学びの本質を追究する「実学教育」をベースに教育活動を実施することを重視し実践している。中学では、東京農業大学（食品加工技術センター・農学部、地域環境科学部、生物産業学部）、日本養殖振興会・グローバル教育関連業者等の支援を受ける。高校では、教科単位での校外学習（フィールドラーニング）を展開する。	体験・実験・観察を重視した科学的・学問的探究の精神・態度の育成を図る。	① 「総合的な学習の時間」の一環としての屋上菜園でのダイズ栽培と醸造体験（味噌作り）、養殖体験等を実施（中学）。 ② 博物館研修における調べ学習とプレゼンテーションの実施（中学）。 ③ フィールドラーニング（校外学習）の実施（高校）。	① ダイズ栽培と醸造体験（味噌づくり）、養殖体験の実施状況の評価 ② 博物館研修における調べ学習とプレゼンテーションの実施状況の評価 ③ 各教科によるフィールドラーニングの実施状況、参加人数等の検証、中高連携プログラムへの発展実施等への評価	① ～ ③とも当初の予定を上回る規模で実施した。特に中学校では STEAM 教育の一環として古墳見学を行い、建造物の築造方法、道具の活用、デザイン性などへの理解を深めた。農大各キャンパスを訪問する高大連携プログラム「農大 DAY」を実施し、実学教育を農大との連携の中で深めることができた。	A	①～③とも、生徒の知的好奇心・探究心を涵養し、主体的な学習姿勢の確立に結びつけていくには、外部機関の発想と支援を真摯に受け止め、近隣地域、農大、情報大との連携を強化し「実学教育」と「知識の定着を図る学習」、「学びへの姿勢」をいかに融合させていくかの工夫と指導力が必要である。	A	実学教育を深めることができた。 随所に農大の力をうまく使っている。農大併設校だからできる取り組みを今後も継続してほしい。
4	中学・高校とも志願者を増加させ、入学定員の確保を図る。	① 高校：志願者数の増加と定員確保。 ② 中学：志願者数の増加と定員確保。	① 地域社会のニーズに即した教育改革の実行。 ② 広報活動の見直し。 ③ 説明会方法の見直し。	① 教育改革の具体策を講じて、発信する。 ② チラシ配布数と方法、公共交通機関や web 上での広報活動、説明会の実施。 ③ 体験型説明会（中学校）、生徒主体の説明会運営（高）。	左記の具体的方策はいずれも実行した。中学募集の課題解決のために 3 回のウェビナー説明会、入試会場として所沢会場を昨年に引き続き、継続実施した。高校は定員確保できたが、中学は定員確保には至らなかった。 中学入試は、経年的な課題である低倍率の入試からは脱却できなかった。 中高とも女子の志願者・入学者の増加には一定の成果が見られ、総じて、昨年を上回る入学者を確保できた。	A	高校入試では、生徒主体の説明会の開催を引き続き実施する。生徒が前面に出ていく度合いを更に高めていく。 中学入試では志願者数は微増し、入学者数は 3 年連続で 60 台に乗り、都内等、遠距離からの入学者も増えたこともあり、特色ある教育（令和 8 年度は新たに A I 教育を打ち出す予定）と入試改革の発信をさらに強めていきたい。	B	中学の定員確保ができなかった。 他大学との連携を強化して、文系・理系それぞれの大学への進学実績を向上させることが、中学入試の生徒募集の向上には不可欠である。